一橋大学図書館随想記

高垣寅次郎

一橋大学は今年創立百年を迎える。それを慶祝し、記念するためには、『一橋大学百年史』の刊行されることが世間の通例であるが、ここではしばらくそれを後日に譲り、まず『一橋大学附属図書館史』を刊行するということである。幸いに一橋図書館がその内容を充実する上に、大きな時期を画するときにあたって、それは誠によい記念の企てである。そのために、図書館の歴史、元館長の回顧談、特殊文庫の購入と保存の苦心談等について、何か書くようにと小泉図書館長から勧められた。私は戦災によって資料の多くを失い、また老齢のために記憶も薄くなっている。私のまとまらない思い出の如きは、他を益する何ものもないと思うのであるが、求められるままに拙文をつづって、責務の一部を果たすことにする。

人文、社会科学を対象とする大学では、充実した図書館をもつことに大きな意味があるに較べて、自然科学の大学においては、実験設備の整っていることが要求される。それは一般の通念として、いずれの大学でも重点をおいて考えられることである。幸いにして一橋大学では今日に至るまで、歴代の校長、学長をはじめとして、館長はもとより教官に至るまで、図書館の重要性を認めて、その内容を整えることに努力する人びとが多かった。震災や戦災による

図書の被害を、最小限度に防ぎえた幸運にも恵まれたが、それにもまして慶賀し感謝すべきは、このような多数の関係者の多年にわたる努力と協力の集積があったことである。

一橋大学附属図書館はいまや百年の歴史を歩んで、誇るべき社会科学の大図書館となるに至った。かつて故村瀬春雄博士によって蒐集された、災害ならびに保険に関する文庫が、本学に寄贈されて後、関東大震災に伴う火災によって失われたこと、また故三浦新七、故左右田喜一郎両先輩の蒐集された特色のある蔵書が、震災の折りその邸宅で焼失したことは、いずれも誠に痛惜すべきところである。いま図書館に寄贈されてある三浦文庫と左右田文庫とは、ともにその後ふたたび両博士によって集められたものである。これらの諸文庫が焼失せずに大学図書館に収蔵されていたならば、さらに豊富な内容を誇りうるものであったことを、惜しまざるをえない。

一橋大学附属図書館には、大小さまざまの規模のものをあわせて、数十にのぼる特殊の文庫がある。文庫の名称は、おおむねその寄贈者もしくは蒐集者の氏名を表わすのであるが、その内容は、かならずしもその寄贈者によって選定されたものでないのがある。寄贈者はある額の図書購入資金を大学に寄贈して、その内容の選択を大学にゆだね、大学ではそれによって買い入れた図書を、その文庫の内容としたものがある。したがってそれはかならずしも寄贈者の意思には関係がなく、その時に購入にあてた資金の関係によったことである。文庫の寄贈者には無縁の図書が、特殊の文庫として保蔵されてあることにある友人が不審をいだいて、私にその事情の説明を求めたことがあるのは、無理もないことであった。

私は、東京商科大学に附属図書館の制度ができた大正十五年からその館長に兼補され、昭和十一年までその職を続けた。少年のときから読書が好きで、あるいは蒐集本能というか、それを集めたりすることにも大きな興味をもっていたので、図書館の仕事は非常に楽しかった。メンガー文庫の整理やカタログの編集に、村松恒一郎、杉村広蔵、山

口茂諸氏とともに興味をもって努力したのは、その頃のことであった。ともに当時を語りうる友人は、今はただ村松教授が残っているだけだと思う。メンガー文庫を手に入れるについて、ヨーロッパにいて尽力された金子鷹之助、渡辺大輔教授はすでに故人となり、大塚金之助教授ひとりを思い浮かべうるのみである。

当時の図書館で最も注目された貴重な文庫は、メンガー文庫とギールケ文庫とであって、前者については、とりあえずはじめに経済学に関する部分の目録のみが刊行された。後者はもっぱら故岩田新教授によって、その整理や目録の製作が熱心に進められていた。大平善梧、吉永栄助両教授などは当時その作業を手伝っていたと思う。

これら両文庫の印刷目録を較べて見る人々には、両者の間に著しい対照の存することに気づかれるに違いない。すなわちギールケ文庫にあっては、岩田教授自らの思考に従って精細な分類が施され、文庫の整理が進められていた。それはまったく岩田教授の苦心による成果であって、法学者ギールケの関知するところではない。それに反してメンガー文庫の場合にあっては、メンガー自らの施した分類がそのままに残されている。偉大な経済学者の思考方法を尊重するためには、できるだけ忠実にその考え方に従い、あえてそれに変更を加えないことが妥当であると、私どもは考えたのである。このような考え方の違いについては、あるいは批判の余地がありうると思われる。

最近一橋大学には、三井関係会社の多大の厚意によって、ニューヨークのバート・フランクリン書店が蒐集した巨大な文庫が寄贈された。これまで保有する多くの文庫とすべての収蔵書をあわせて、世界屈指の社会科学の大図書館となる。このように質量ともに誇るべき設備をもつに至ったのは、一橋大学の創立百年を記念するにふさわしい、慶賀すべきことである。これらがよく整理されて自由に利用されるようになるまでには、なお相当の月日を要するかもしれない。これが多くの研究者によって十分に利用され、学問の進歩に貢献することは、一橋大学にかかわりをもつものすべての、心から念願するところである。

筆をおくにあたり、生涯を一橋大学図書館にささげて精励した川崎操君にたいして、深く敬意を表したい。（昭和五十年三月二十一日記）

（初代一橋大学附属図書館長、一橋大学名誉教授）